



撮影・森繁

一夫一婦制は最高の制度か



橋爪大三郎

結婚をめぐる四つの定義

ひとはなぜ、結婚するのか？

これは、大問題だ。で、よく考えると、
①一人ひとりの人間がどうして結婚するのか、②人類はなぜ、結婚という制度を選択しつづけてきたのか、この二つのレヴェルの疑問が合わさっている。結婚の持つ社会的な意味合いを考える場合には、まず後者をしっかり押さえたほうが理解しやすいと思います。

そこで、人類はなぜ結婚するのか、という問題ですが、結論を言うと、それは、結婚という制度がなくなってしまうたら、困る人が大勢いるからです。それで、その人たちの声が、結婚はあったほうがいいという圧力になって、結婚という制度を支えて

きたのだと、私は思っています。

もちろん、結婚制度がなくても困らない人も、なかにはいる。たとえば、ちよつと小金をためては、あつちで浮気し、こつちで子供を作り、という人たち。こういう人たちにとっては、結婚なんてないほうがよい、と言えるかもしれない。でも、そういう一部の人の個人的なメリットを認めず、ほとんどの大部分の人たちに、不利益が及ぶという構造が、結婚制度にはあるんですね。

だから、結婚とは、一種、社会保障に近い制度なんじゃないかと、私は思う。

結婚に関しては、まず、こういう構造から理解しないといけない。ここを押えておかないと、結婚なんかそのうちなくなるとか、形態が変わるとか、いくら結婚の未来像を予測しても、空理空論になるんですね。

そういう議論は七〇年代に、ヒッピーの間でさかんに語られ、アメリカの学者たちもずいぶん嘘八百を並べましたが、結果的に結婚は全然なくならなかった。

そこで、改めて結婚を「定義」してみますと、私は、四つほどの要素から成り立っていると思うんです。

第一に、男女のペア（対）であること。

第二に、そのペアである状態が、相当な長期間に及ぶこと。この長期間とは、原則として無期限なんです。無期限でないという。というのは、かなり長期間でも、有効期限があつてはじめてから何月何日で終わるとわかつていれば、あと三年、あと一年、という具合に残された期間がだんだん迫ってくるにつれ、ペアの関係が変質してしまうでしょう。結婚という制度が、一種の社会保障としてある以上、そういう変質は不

都合です。昨日も明日も、五年経っても十年経っても、同じなんだ、という関係を続けるには、無期限であることを前提にしなければダメなんですね。結果的に、すぐ夫婦別れてしまったとしても、です。三番目に、最大の正当性を要求できること。最大限(マクシマル)の正当性って、ちよつと言葉遣いが難しいんですが、わかりやすく言うと、例えば、ちよつと以前の日本で言えば、本妻がいて、二号さんがいて、さらにほかのお妾さんや、子供を産んじやった人とか、最近付き合い始めたばかりの人とか、たくさんの区分があつたでしょう。で、正妻と二号さんが会うと、二号さんがお辞儀したりして、地位が下であるという不文律が存在していた。ちゃんとランキングがある。夫婦そつくりの生活をしているように見えても、それより一段低いと見られていけば、それは結婚じゃない。多かれ少なかれこの国でもそうだと思いますが、結婚によく似ている男女のペアというのがあつた。しかしその場合、ある側面をとると、そういう男女のペアは結婚にかなわないという構造になつていゝ。つまり結婚が、夫と妻の、相互に対する要求権が、一番高く位置づけられているんです。逆に、ある社会で、一番相互の要求権が高い関係を、結婚と呼んでいるんですね。

期間」とは言えない。浮気と本気という区別もない。子供の帰属に関しても、そもそも父親という觀念がない。だから動物には、オス・メスのペアは存在するけれども、さつきの定義に照らして言えば、人間のような意味で「結婚」しているとは呼べませんね。じゃあ、人間が一番近いサルの場合はどうかというので、以前、今西錦司さんやそのお弟子さんたちが、一匹一匹に名前をつけて、誰が誰を撫でたとか、翌日は誰と一緒にいたとか、詳しく行動を調べたことがあるんですが、結論として、やっぱり結婚のような結びつきを見つけないことはできなかった。で、人間だけが、結婚をする唯一の種なのではないか、という仮説が立てられます。でも、この点は、証拠が完全でないで断言できないけど。

一つ、よく言われているのは、人間の子供は、早く生まれてしまうというのがあります。直立歩行で骨盤が狭くなつたせいかもしれないが、母親に抱きつけないくらい未熟な状態で生まれてしまう。サルの子供は、生まれた瞬間から、母親に抱きつきます。どういふことかと言うと、母親が勝手に動いて、エサを探りに行けるんですね。逆に言うと、人間の子供は、あまりにも無能力なので、約三、四年にわたって母親が、もつぱら子供の世話をしなくてははいけない。

もちろんその要求権の中身は、社会によつてまちまちでありうる。たとえば、貴族制のころのフランスでは、財産関係が一番重要視されていて、それが、結婚の一番の目的だと考えられていた。すると、極端に言えば、ほかのことはどうでもいいわけ。結婚した女性は「さあ、自由を手に入れた、恋愛をしましょう」と、旦那さんじゃない人を渡り歩くのが文化として定着していたりするわけですよ。それは、われわれから見ると、結婚の内実が全然ないようにも見えますが、その社会では、それが結婚なんです。ある側面(財産関係)に関して、その男女ペアの要求権が非常に高くて、それで結婚の要件が成立しているからです。

そのほかにも、社会によつて、いろいろ突飛な事例をめぐつて、結婚が定義されているところがあるでしょう。でも平均して言えば、一緒に暮らしてるとか、一緒にご飯を食べているとか、性交渉があるとか、そんなことが、最大公約数的に、結婚の概念としてまとまっている。それらの側面で、最高の正当性を要求する。簡単に言うと、結婚していれば当然の権利として、浮気を怒つていいわけです。

四番目は、子供の帰属です。母親が結婚していれば、自動的に彼女の夫を父とみなす。このルールは、どんな社会でもほぼ例で、子供を育てている間、母親の生活能力がなくなるから、どうしても男の助けが必要になる。

ところが、男にしてみれば、ほかの若い女を追いかけたところなのに、子連れの女を助けてやらなきゃいけないというのは、非常な損害である。そこで反対給付、見返りが必要になる。それがセックスじゃないかというのです。一般に動物は、子供を育てている間はセックスをしないんですが、人間の場合、ゴリラやチンパンジーにある発情期(性周期)というのが完全になくなくなつて、いつでもセックスできるようなやつ。サルと人間の大きな違いはここです。人間は、そのおかげで、子供を産むことを經由しながら、男性と女性が、長期間にわたるペアを組むという社会関係を生み出した。人間は性的能力が非常に高まり、そのために、安定したペアを形成する能力が高まって、それで育児の問題やさまざまな問題をいっぺんに解決する男女のペアというものをも発明したんですね。

だからたぶん、人間は、最初から結婚する動物だった。これが、動物学者がいろいろなことを証拠に、思弁をめぐらせて考えた結婚の起源です。

特に性的に親密であることを核にした人間の結びつき——それが結婚であり、家族

外がありません。もし母親が結婚していなければ、誰を父とするかに関して、いろいろな可能性が考えられるわけですから、さして、以上の四つが揃つて、はじめて「結婚」と呼べる。私はこの四つを、結婚の必要にして十分な条件だと思つています。そのうちのいくつかが欠けると——たとえば、二、三、四の条件が揃つていても、男女のペアでなかったりすると、結婚とは認められない。まあ、最近のアメリカでは、そのへんが微妙ですが、まず社会的に認められない。また例えば、一、三、四と揃つていても、有効期限のある結婚というのはいちよつと考えにくい。

では次に、いつごろから、人類は結婚を始めたのか?

これは、質問を変えると、人類は、人間になつて、しばらく経つてから結婚ということを発明したのか、それとも、人間になつた途端に結婚していたのか、となる。これはちよつと面白い問題です。

さつき述べた四つの条件に照らして考えてみましょう。

人間以外の動物が、そういう条件に合う関係を作っているかというところ、そういう動物はいないわけですよ。たいていの動物は、発情期ごとにペアの相手が変わるので、「長である。どれも、人間が発明したものです。でも、その一方で、家族を超えた集団(社会)というのも必ずあつて、その両方成り立っている。家族と全体社会とが区別されているというところ、人間社会の最大の特徴なのです。

人類は初めから一夫一婦制だった

じゃあ、結婚は人間にとつて必要な制度なのか?

結婚は、やはり、それなりにメリットの大きい制度だと思ひます。人びとの必要を満たしている。それは、次の三点に大別できるんじゃないでしょうか。

まず第一点として、安定したペアであることの心理的な安定感。

第二点として、子供の養育の問題が、解決されているということ。

これは、次の世代のメンバーを社会に迎えるにあつて、社会は直接責任を取らず、その子の母親や父親といった家族にその責任を分担させているということです。大人になつて社会に参加するまで、社会は面倒見なくていいという仕組みになつていゝ。第三点として、老後の問題があります。だんだんよぼよぼになると、子供のときとはまた別な意味で、生活能力がなくなつて

くる。食事を運んできたり、介護をしたりする第三者が必要になるけど、やはりそれも家族の負担ということにすればなにかと都合がいい。夫や妻が主体になって、子供や老人の面倒を見る。家族という集団があれば、そういった問題もある程度解決するんでね。

以上の三つの問題が、全部自動的に解決するというすごいシステムが、家族です。もちろん本人にとっては、けっこう負担になるけれども、逆にリスクを回避できる。自分に能力がある間はコストを分担し、自分に能力がなくなったときには、相手からサービスを受けられるわけだから、これも一種の社会保障、保険なんです。まあまあ平均した生活水準を維持できる、そういう機能がこの小集団にはある。これに取って代わるメカニズムを考えつかない限り、結婚と家族はなくならないと思います。

もともと、いまの若い人たちが結婚するときに、そうしたことで意識していかないと、ほとんど意識していないでしょう。結婚制度が選択されるということ、めいめいが結婚の対象を選択することは、別のレベルで行なわれている。たぶん結婚という制度は、人類の無意識のレベルに定着しているんでしょうね。

ここで、さきほど言った心理的安定感に

に映画見に行ったねえとか、デイズニードに行ったねえとか、経験が共有される。それに対して結婚の場合、共有されるのは、生活時間なのです。だから恋愛と同じく、原則的に相手が何をしてるかということとは、ほぼ知っています。もちろんそのなかに、知らない部分があっても構わないんですけれど。恋愛との大きな違いは、それが無制限に永続する時間だということ。そのため、対象がほぼ一人に限られてしまう。こういう構造的な差があります。

恋愛のチャンスが、実に不平等である理由は、自分が支出する時間が、全生涯に渡らなくて、断片的でいいからです。そこで、巧妙に立ち回れば、次々に恋愛することもできるし、同時に何人とも恋愛することが可能だ。けれど、結婚でそれをするのは、時間の構造から言って無理なのです。これはマッチングゲームですが、すでに結婚している人を結婚の対象に選べないというルールを定めると、おおむね結婚は平等にならざるを得ないということがわかります。恋愛の場合、とび抜けて優れた能力を持っている人や、きれいな人に人気が集中しやすいけれど、結婚のほうは、ある程度現実的にならざるを得ないから、ほぼすべての人が、だいたい分相応の人と一緒にされる。この平等の側面が、結婚にとって一番重要

関して、もう少し補足しておきましょうか。結婚というのはふつう、一対一でしますね。これは、男と女がちょうど一対一に近い比率で生まれてくるということとも関係しているわけですから、かなり、絶妙な側面があるわけですね。

結婚を、恋愛と比較するとわかりやすいと思うけれど、恋愛のチャンスというのは、非常に不平等です。それに対して、逆説的で皮肉に聞こえるかもしれないけれど、結婚のチャンスは、恋愛のチャンスに比べると、ずっと平等である。日本で言えば、実に九割以上の人が、結婚するという現実がある。自発的な意志で結婚していない人もかなりいますから、この数字は、望めば、ほとんどすべての人は結婚できるということとを表現している。こんなに平等なことはいません。

恋愛は、結婚に比べるとほんとに不平等です。両手の指に余るほどの経験があつて、恋人の整理に困っているような人もいれば、全然なしの人もいて、かなり個人差がある。なぜこれも結婚と違うのかというと、時間の使い方に原因がある。私は、人間関係を時間の使い方から分類して、友人関係、恋愛関係、それから結婚の三つに分けられると、常々思っているのです。まず友人。これは、関係が抽象的です。

なことなんじゃないかと思えます。そして、この平等の条件と深く関係しているのが、一夫一婦制です。

たいていの社会が、やはり、一夫一婦制を採用しています。例外として、多妻制とかを認めている社会があつたとしても、落ちつくところは、結局一対一という関係になつている。

一夫一婦制ないし単婚（英語でモノガミーといいますが）以外の、一妻多夫制や一夫多妻制（複婚、あるいはポリガミーといいます）というのは、ヨーロッパのキリスト教が認めてない習慣だった。それが、一九世紀に世界のあちこちで発見されたので、当時の学者は大変興味を持って、これはきつと古代に、そういう結婚制度が盛大に行なわれていて、その名残り（遺制）に違いないと騒いだんですね。

でも、実はこれ、全部でたらめなんです。エンゲルスなどもこの説を信じたので、マルクス主義者のなかには、いまでもこう考えている人もいるらしいんですが、彼らの信じたパツハーフエンとかL・H・モルガンという一九世紀の人類学者によると、人間は最初、群婚と言って集団で結婚していて、次に、略奪婚といって、腕ずくで女性を奪って自分の妻にしたとかいうんですね。よく漫画で、毛皮を着た原始人が、ト

「さよなら」と言って別れて、次に会うまで、相手が何をしているかを全然知らなくてもいい関係。これを友人という。間が三年飛んで一日会って、という関係が可能です。と、どうなるかという、友人というのは、財産と同じで、ほぼ無制限に数が増やせる。こういう、ローコストで維持できる関係が友人である。

それに対して、恋愛関係というのは、相手の行動をトレースする。相手がいま何をしているかということ、ほぼ知っている関係なのです。頻繁に連絡が入ったり、頻繁に会ったり、考え方の変化をチェックしたりしている。そういうふうには、お互いに関心を持ち合う関係というのは、あきらかに友情とは一線を画しているわけです。だから連絡がとれなくなると、焦ります。プライドをこらえて、電話をかけたります。それでも、どうしても連絡が取れなかったりすると、ああ関係が終わったな、と思わざるを得ない。それが、友人関係にない特徴なのです。

もうすこし詳しく、恋愛を時間で定義すると、「ある一定時間を共有する関係」ということになる。それは、一週間で終わるか、何年続くか知れないけれど、一定期間を、永続しなくても構わないという前提で、共有することなんです。そこでは一緒に

ゲトゲのついたこん棒で、女をなぐり倒して引きずっていくというのがあつたんですよ。

あれが略奪婚。ああいうことをやってたという。それから姉妹と結婚するとか、だんだん移行していつ、最後に行きついたので一番よい一夫一婦婚だと言ってますけども、以上は真つ赤な嘘。なんの証拠もない。現代の人類学者が調べたところによると、核家族と言いましょか、一夫一婦制というの、世界中どこに行っても一番多いんです。そのほうが最初からあつたノーマルな形態なんじゃないかというのが、一般的な学者の見解です。

では、どうしてときどき、一夫一婦婚でないものが生まれてくるのかというと、それは、財産とか社会的地位という要素が絡んでる場合が多い。

奥さんをたくさんもらつていいという例外条件を認められる代表的な例が、王様とか酋長とかいった、大きな権力を持つている人々です。こういう人は、当然少数なわけだけど、気苦労が多くて大変だからその埋め合わせにとか、誰かにプレゼントされたからとか、いろいろな部族とうまくやるため政略結婚するのでしかたなくとか、いろいろ理由で女性が集まりやすい立場にいるわけです。

もうひとつ考えられるのは、財産として

女性を見る場合です。物質的に素材でシブ
ブルな生活を営む社会の場合、人間がいち
ばん資産価値があるんですね。だから、女
性をどういうふうに分けるかということ
に関して、すごく神経質だった。それが次
第に、それ以外の土地とかお金とか奴隷と
か、新しい資産価値が社会のなかに回り
はじめると、女性もさることながら、お金
や土地や奴隷を集積することのほうが大切
になる。で、そういうのをたくさん集めて、
それでも一度女性をもらってこようとい
う考え方が出てきたりする。そういうふう
に、財が一部に集中すると、その結果、女
性も一部に集中していくというパターンが
起ります。これも、あるタイプの一夫多
妻制ですね。でも、これはあくまで例外で
す。あるところにお金が集まるとしても、
お金が集まらない人のほうがもっとたくさ
んいるわけです。そういう人は、どうした
って、普通の方法で結婚するか、そうでな
ければ結婚できなくなっちゃう。

中国の場合は、権力者が例外的にたくさ
ん奥さんを持つことを、儒教が公認してき
ました。それから、商人たちは、儒教道徳
にあまり合致しない人たちであるうえ、広
い中国大陸をここに何カ月、あつちに何カ
月と移動する関係で、あちこちに奥さんの
いる場合があった。

もう一つ、一夫一婦制じゃないものとし
て、イスラム教のケースがありますね。イ
スラム教では、どうして四人まで奥さんを
認めているのか。普通信じられていたのは、
イスラム教の起こった当時は戦争が絶えな
くて、ムハンマドの戦友たちが、奥さん子
供を残したまま、大勢死んじゃったことに
始まる、という説です。当時女性は再婚で
きないと、結局売春婦に身を墮とすしか生
きのびる道がなかった。これではあまりに
むごいというので、生き残った信者たちが、
戦友の奥さんを妻にすることを積極的に奨
励したんですね。その代わり、奥さんには
なんの差別もしてはいけなかった。例え
ば、何かラットのダイヤをA子さんにあげ
たら、B子さんにも同じものをあげるよう
に、と非常に厳密なルールが決まっている。
それができないなら結婚しないようにと。
こんなことができるのは限られた人だけだ
から、イスラム教徒といっても一般の人び
とは、一夫一婦制についてわれわれとそん
なに違った感覚を持っているわけではない
と思います。

脱一夫一婦制は可能か

六〇年代から七〇年代にかけて、いわゆ
るヒッピー文化が登場し、一夫一婦制を否

定したりフリーセックスを認めたりする運
動を進めましたが、結局挫折した。
ああいう実験的な運動が、一夫一婦制が
盤石のように見えたアメリカで起こったと
いうのが、面白いですね。アメリカは、五
〇年代のTV「パパはなんでも知ってる」
に代表されるみたいに、郊外に住む核家族
が揺るぎない文化模範として存在していた。
そういう家庭で育った子供たちがヒッピー
になって、逆に結婚制度を否定しようと思
ったというあたりが、面白い現象だと思う
んです。

どうしてそんなふうになったのかという
ことは、簡単には言えませんが、まず專業
の主婦というのは、あまり面白くないらし
い。統計でも、アル中とかいろいろ問題
が、やたらに專業主婦に集中している。主
婦だって、家庭に閉じこめられるよりは、
やはり外へ出て社会と関わりたいわけです。
子供にしても同じようなことが言える。自
分たちの家庭が理想的だと思っていれば、
なんにもヒッピーにならなくてもいいわけ
で、実際は、とてもいいものだと思えないよ
うな体験をいろいろしてしまっただけじゃ
ないと考えられる。

それで、こういう対立が起こったと思
います。アメリカのモラルによると、結婚生
活を維持していくには、愛情がなければい

けない。その一方で、誰に愛情を感じ、誰
と一緒にいるかは、まったく個人の自由
に任されている。自由こそ、アメリカでも
とも正統的な価値を持っているわけです。
そこで子供たちは、自分の自由に生きたい、
という選択をした。そうすると、一夫一婦
制の核家族は、理想像でなく、その自由を
束縛する慣習に見えたのではないか。

一夫一婦制は、先ほどから言っているよ
うに慣習ですから、それが絶対だという根
拠があるわけではない。しかもアメリカの
場合、財産権や男女の性役割などがセット
になって、「これがアメリカ文化です」とい
う押しつけがましいライフスタイルを形成
していた。若者たちは、この慣習を踏み破
って、自分たちなりの愛情や、新しい家族
の形を探さなければいけないというふう
に思ったんじゃないだろうか。そこで、いろ
んな実験が、出てきたんだと思うんです。

けれど、この実験にはいろいろなパラド
ックスが潜んでいた。自由だけでは、夫婦
(結婚)も、一夫一婦制も、家族も導けない
わけです。例えば、親は自由だと言って、
子供を作ったとしても、子供にしてみれば、
自分の好きで生まれてきたわけじゃない。
誰かがその責任を取らなければならぬ。
そうすると、もうそこには自由の論理は働
かなくなっている。フリーセックスやコミ
ュニケーションの自由な家族形態は、たい
いの場合、ちょうど出来てから五年目から七
年目ぐらい、子供を学校にやるかどうかと
いう段階でもめっちゃって、だいたい失敗
したんですね。

ですから、自由という考えただけでは、
核家族の抱える問題は解けないと思う。さ
きほども言ったように、核家族は、子供の
養育とか、老後の養護問題なども、総合的
に解決する、無意識の合理的なシステムだ

から、その全体を作り変えるプランをみん
なが思いつかない限りだめなんです。恋愛
の延長線上に結婚があるなんて単純な考え
方では、このシステムに対抗できないん
ですね。
いまアメリカで、ヒッピーたちに代わっ
て伝統的な一夫一婦制に抗議の声をあげて
いるのは、ゲイやレズビアン同士のカップ
ルです。こういう人たちは、新しくコミュ
ニケーションを作ろうなどと思っているわけ
はななんです。伝統的な結婚観の内部に
いる人たちが、異性ではないんです。これは
病気が、異性ではないんです。これは病
気とかではなくて、いまさらどうしようも
ないことなんです。そうすると、ゲイ同
士で結婚するとか、レズビアン同士で結
婚するという選択をせざるをえない。結婚
と呼べるかどうかは別にして、現にそうい
う生活をしている。すると、まず子供の問題

外部協力スタッフ

募 集

リクルーティング用パンフ
レット、ダイレクト
メール、その他
企業広告の
制作

制作プロダクション
ディレクター
コピーライター
デザイナー
カメラマン

株式会社文化放送ブレイン

事業内容▽人材採用に関する情報提供・広告の制作

〒160 東京都新宿区左門町3

左門イレブンビル

連絡先
TEL.03-3355-2131
担当/佐藤・塚原

が生じる。本人たちは、家族的な規範のなかで生活したいと思っているから、どうしても子供がほしくなってくる。養子をおうということになる。けれど養子というのは、いま数が少なくて順番待ちの状態です。まして、おまえたちは同性愛者だから、という理由で後回しになったりする。そこでそういうカップルは、自分たちにもふつうの夫婦と同じように、養子をもらう権利を認めてほしいという要求をするんです。こういう運動があちこちで起こっています。が、着実に認められていくに違いない。

男女の一对一のペアというのが、結婚のノーマルな形であることは、生理的にも生殖のプロセスからしても、当然なのですけれど、同性愛者のようなマイノリティの人たちの居場所がまったくなくなってしまうというのは問題です。アメリカはいま、それを見直そう、もう一度結婚を再定義しようとしている。そういう運動から、われわれも、見習うべきじゃないでしょうか。

それから、もう一つ考えなければいけないこととして、どうして歴史上、一夫一婦制という制度が、これほど長く続いてきたのか、ということがあります。

これは、そのなかで、世代の再生産が順調に行なわれてきたからです。女性だけが

子供を生み、そして家族だけが子供を育てることができたから。

でも、こうした基盤は、やがて崩れる日がくる、と私は思う。

というのは——ここから先の話は、あくまで私ひとりの説なので、これを話すとたいてい笑われちゃうんだけど——人間の誕生にとって一番重要なのは、養育（子育て）であって、出産ではないんです。出産はむしろ負担である。どうして負担なのかというと、人間が二足歩行に移行したときに、歩くときのバランスの関係で、骨盤の幅が狭くなってしまったでしょう。女性の骨盤の横幅は、男性より広いけれども、子供の頭が出てくるぎりぎりの大きさなんです。だから、人間のお産は重い。

見方を変えると、二足歩行をして、しかも自分で出産するなんて、不自然な行為なんです。出産をしなくてすむのであれば、そのほうが楽だというのは、人間の生理に根ざした希望だと思える。

で、どういうふうにすればいいか、いろいろ考えた結果、私が思いついたのは、これはブタだなんて思ったんです。ブタは、家畜のなかでも子宮が大きくて多産で、内臓のつくりや大きさもほとんど人間と同じなんです。だから、ヒトの受精卵をブタの子宮に移植して、生んでもらうのに、まこ

とに都合な条件がそろっている。

代理母みたいに、よその人に産んでもらおうという発想がアメリカにあるでしょう。でもそれは、問題が多い。産みの母と遺伝的な母という問題が必ず起こってくるし、結局誰かに出産の負担をかけることには変わりはない。第一、非能率です。それに、生む人・生ませる人というふうには、女性を二種類に分けることにもつながる。

でも、動物に生まれさせれば、こういった問題は起こる心配がない。人工子宮でもいいんですけど、わざわざ人工のものを作ったりするより、家畜の子宮を利用したほうが技術的にはるかに簡単だと、私は十年くらい前に直観的に思ったんです。

都合がいいことに、胎児は、驚くほど免疫反応に柔軟性があるんです。母親と血液型が違ってても、胎盤が間にはさまってれば、ちゃんと生きていけるでしょう。拒絶反応がもともと起こりにくい。Rhマイナスみたいなケースもありますけど、これは母親のほうに拒絶反応が起こるから流産するんです。だから、母体のほうにそれだけ柔軟性があるか、血液型や遺伝子型の適合性があれば、ブタのように異種の動物であっても、なんとかうまくいくはずだ、と思っただけです。

そうしたら最近、ヒトブタというものが

実際に開発されている、という話を耳にしました。これは、ブタの受精卵に、人間の

遺伝子の一部をガラス管で注入し、免疫不適合が起こりにくいブタを作るという研究で、もうかなり進んでいるみたいなんです。ね。その最終目的は、開発したヒトブタの臓器を、臓器移植に利用することらしいです。けど、これが成功すると、脳死問題やドナー不足なんて一挙に解決してしまう。ヒトの肝臓なんかを無理に移植しなくても、ヒトブタという形で、最初から拒絶反応がない種を作っておこうという発想ですね。

で、臓器移植の場合は、拒絶反応を完全にコントロールしないといけないわけですが、胎盤の間にはさんで、子宮をちょっと借りるだけなら、そこまでのコントロールはしなくて済みそう。だからこの方法は、技術的には、かなり近い将来に可能になるんじゃないかと思われるんです。まあ、みんながみんなブタから生まれる必要はありません。伝統的なスタイルで生みた人は、それで生んでくれればよいわけで、大事なものは、どちらの方法も選べるということです。

で、結局私が言いたいののは、子供が生まれるか生まれないかということは、自然に任されていた時代もあったけれど、いまは、選択的な時代に入っているということです。

選択的な時代というのは、ある人が子供がほしいと思ったら、そのときに子供が産まれてくるべきで、養育の条件が整っている場合に、その子は幸せな人生のスタートを切ることができると（つまり、生まれるべきだ）というふうな考えられる。

では、誰が、子供がいたほうがいいなあと思う権利を持つのか。夫婦は当然として、たとえば、女性が一人でそう思う権利があるのだろうか。当然、個人の自由ということとで考え進めれば、女性一人でもその権利はあると考えられる。それに、現に生まれてしまうものは仕方がない。そうすると、未婚の母というの制度として考えられるということになるわけです。

未婚の母をめぐって、世界中に二つの類型があります。一つは中絶がやたらに多くて、未婚の母が極端に少ない社会。もう一つは中絶があまりなくて、未婚の母が極端に多い社会です。日本は、前者の代表。スウェーデンなどは逆に、後者の代表です。

両者の差は、価値観によるわけで、日本の場合、中絶などないとしたことはない、それより未婚の母になることのほうが問題が多い、と考えている。一方、スウェーデンでは、生命を尊重するから、中絶は許されないわけですね。胎児を殺すことに比べれば、未婚の母になることのほうが、社会的

に許容できると考えている。そこで、未婚の母が多くなるわけです。

しかし、未婚の母というのはやはり、社会が家族のノーマルな形態を前提に維持されている以上、父親がいない家庭ということになりますから、生まれてくる本人のために、プラスかどうかという問題がやはり残る。よしあしを論じないとしても、少なくとも、普通の結婚から生まれる子供と違って、そういう点は否めません。

そこで私が考えるのは、子供を養育する安定したグループとして、夫婦のほかに、もっといろいろなタイプがあってもいいんじゃないかということです。先ほど言った男性と男性、女性と女性という夫婦があったっていいと思うし、結婚という形にとらわれる必要もなくていい。例えば、結婚をしないことを選択した三人の女性（レズビアンでない）が共同して子供を育てることもできるし、男性が何人かと女性が何人かのグループでも、あるいは自分の子供が大きく変わったおじいさん・おばあさんとか、多様な人たちが多様な形で、子供を迎えるというやり方があると思う。自分で生まないですむのであれば、そうしたことが可能だ。出産をめぐる固定観念——子供を生んだ以上、子どもの親であって、育てる権利があつて、という権利を全部セットに

した考え——は、そろそろ疑われていい時期なんじゃないでしょうか。もし、そのことが疑われて、子供の生まれ方のいくつものタイプがある程度公認される社会ができたとすると、その日こそが、一夫一婦制の崩れる日じゃないかなと思います。これは、技術的な可能性（ヒトブタの子宮）が与えられただけで実現するというではない。その技術的な可能性を生かそうという人たちが大勢現われて、それを一つのライフスタイルにし、社会的に公認されるまでになる。そうしたときに、一夫一婦制を超える緩やかな結婚の形態というものも出てくるんじゃないか、と思うわけです。

揺れる日本人の結婚観

ところで、いまの日本人（とくに女性）の結婚に対するイメージは、愛情過多ですね。結婚適齢期の意識も強い。ところが、現実の結婚生活に入ったとたんに、愛情だけではすまされないもろもろがわつと押し寄せてきて、いつきよに現実に戻されてくる。そこがところが両極端になっている。なぜそういう構造になつてしまうのか。いま、大胆な仮説を一つ挙げれば、これは、日本が、ポリネシアやオセアニアといった太平洋の文化圏につながる、かなり原始的

な社会だからじゃないかと私は思うんです。ポリネシアやオセアニアのような太平洋に浮かぶ島々には、年齢集団というのがあるんです。年齢集団というのは、子供は子供、思春期の若者は若者、女性は女性でグループを作り、日本にも昔ありましたけれども、若者宿とか娘宿のようなところで集団生活をする。で、その女性グループと男性グループは、いろいろな交流を経て、結婚に発展する。やがて子供を産むと、今度は、成人の男たち、女たちのグループに入る。そうやって年代ごとのグループをいくつも経て、最後におじいさん、おばあさんのグループに属する、という社会構造になつていく。

こういう社会では、年齢が、その人の社会的地位や役割をあらかじめ決定してしまうんですね。その枠に、個人を押しこんでしまう。日本人は、日常の社会生活で、年齢をとてにも気にするわけです。「適齢期」の意識もそれに根ざすものだ。とくに女性の場合、結婚の時期がある一定の時期に集中しているわけですが、それは、年齢集団という意識の産物じゃないかと思われれます。二十代前半はOLをやつて、二十五歳くらいで結婚するのが理想だなんてイメージは、形を変えた現代の娘宿と言えますね。本来なら結婚なんていつしてもいいはず

だし、ライフスタイルだつて各人各様、みなバラバラで構わないんです。でも、それがまだ実態を伴っていない。娘宿の時期なら一人前じゃないから、結婚さえできればチャラチャラして構わないっていう、いまの日本に見られるような現象が起きるんじゃないでしょうか。で、いったん結婚してしまえば、基本的にはもう二度と結婚しないわけだから、いままでのことはスパッと忘れて、新しい環境に適応するため、こつちのスーパーの大根のほうを五円安い、みたいな生活に入つてしまふわけです。

こういう、いつでも自分が所属している年齢集団に適応し、それに相応しい行動様式を身につけていかななくちゃいけないという現象は、人格の連続性という点でみると破壊的です。自己というものを持つのがむずかしい。これは、南の島でのんびり過ごしているぶんには、それで構わないのかもしれないませんが、職業選択も人生設計もこれだけ多様な産業社会に生きていくのに、これでは困る。われわれが年齢集団の考え方に、無意識のうちにとらわれているとしたら、これはやつぱり不幸なことなんです。子供の養育の問題にしても、近代社会の特徴として、共同体意識がほとんど希薄になつていくことがあります。

近代社会では、人間関係が、時間と空間

を超えてしまつていく。昔のように、目の届く範囲に、おじさんおばさんがいたり、近所が顔見知りでお隣りに頼めるとか、そういうものが、とくに都会ではますますなくなつていく。コミュニティが崩壊しているんです。そしてそれを、もう一回作り直そうとしても、限界があるんじゃないかと私は思う。農村のように、共同作業をして苦楽をともにするような、一緒に住んでることに意義のあるようなシステムを作れば別かもしれませんが、東京などは、そういう負担を極小にするメリットを追求してきた場所ですからね。

けれども、核家族、とくに都会の核家族が、かなり多くの問題を抱えているのは確かだ。もともと家族は、家族でカバーできないところを、共同体や地域社会に預けて、かろうじて成り立っていたような部分があった。それがいきなり、そういう脈絡を剥ぎ取られて、都会に放り出されてしまった。それが、いまの核家族と言えます。当然のことながら、いろいろな病理現象が起つてきます。母親が異常に子供にかまひすぎたり、逆に、母親も父親も忙しすぎて、まったくかまわれない子供がいたり、メダルの表裏のようなことが同時に起きている。子育ての問題は愛情で解決できると人びとは思いがちですが、愛情があつても、方

法論がなければやはりダメです。ところが、いまの日本では、ほとんど育児の素人である母親に、すべてが任されているというのが現状です。親だから教育やしつけができる、なんていうのは錯覚なんです。親でも、脂が乗ってくるのは、五人六人と育てて経験を積んできた段階にすぎません。昔はそういう大家族もあつたんですけど、いまはほとんど無我夢中のうちに、一人か二人で子育てが終わつちやう。だから、育児のプロなんてどこにもいないと思つていい。愛情があるということ、育児がうまいということとは、全然関係ないことです。だから、愛情を与える人のほかに、子供に必要なステップを十分踏ませ、社会的なトレーニングを積ませることのできる第三者が、家族の周りにもつといてもいいと思います。ところが、いまはそういう部分が、塾とか、上の学校に進むための努力に集中してしまつていく。もつと、そうじゃないところに、お金と資源と人材を投下していかないと、子供はまともに育たないんじゃないか。少なくともアメリカでは、キャンプとか、地域社会でベビーシッターのアルバイトをさせるとか、そういうコミニニティの伝統というのが残つている。それに比べて、日本は、もともと無自覚に出来上がった伝統にすぎなかったものが、突然なく

なつちやつたものだから、そういう地域社会の機能はほぼ破壊されてるんですね。

いまの子供は、学校と家庭と盛り場、この三角形以外には動いてないですね。学校は管理される場所だし、盛り場はお金を出せばたいていのは解決してしまう顧客関係にすぎない。他者と出会う場所、社会関係を学ぶ場所というのがどこにもない。この三角形のまん中に、やはり他者と出会う場所というものがあつていい。さもないと、非常に功利的な世界観しか育たない。大人になつたつて、よく考えてみれば、学校が企業に変わるだけで、さっきの三角形の枠からはみ出るわけではない。一生そのままだ、という人だつて出てくる。人間関係のパターンが、その中から出ないでもすむように設計されているんです。そこからみ出るのは、ストリートギャングだったり、暴走族だつたりという、反社会的な形になる。あるいは、そういう欠落した社会性を埋めてくれるようなもの、たとえば新興宗教みたいな形になる。でも、そういう特殊なものじゃなく、もつとまつとつて、一生続くものが出なさいいけないんですね。そこがこれからの日本はしつかりしないと、家庭も家族も、ガタガタになつてしまふと思ひます。

（社会学者）